

エコ・リサ交流集会2025

2025年2月20日（木）14時～16時30分、大宮ソニック702号室にて、交流集会を開催いたしました。会場参加者21名、ZOOM参加者8名でした。

埼玉県資源循環推進課安藤課長から祝辞をいただき、3団体が活動発表、その後ごみ減量について活発な意見交換をしました。



主催者挨拶

特定非営利活動法人埼玉エコ・リサイクル連絡会 石川恵輪会長

皆様こんにちは

ご紹介いただきましたNPO法人埼玉エコ・リサイクル連絡会・会長石川恵輪です。

主催者を代表いたしまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日は埼玉県をはじめ皆様のご協力をいただきまして第35回目となります交流集会が無事に開催出来る事に感謝申し上げます。

本日は会場とzoomでのハイブリッド開催ですので不手際がございましたらお申し付けください。

まず初めにこの35回目を迎える長い歴史の交流集会を共に築いてきた土淵昭さんが昨年お亡くなりになりました。土淵さんのこれまでの多くの功績に敬意を表すとともにご冥福をお祈りいたします。

さて今年はSDGsの実践という事での活動事例の報告をいただきます。

もともと交流集会初期のころ少し前よりリサイクルという言葉が使われ出し、その後3Rとなり言葉の意味が細分化され、循環型社会だとか拡大生産者責任とか最近ではサーキュラーエコノミーとか新しい言葉が増えています。当初は廃棄物をどのように減らすか、再利用するかという観点でしたが、最近では生産段階からあらゆる段階で資源の効率的・循環的利用を図りながら付加価値の最大化を目指すという事で、物事のとらえ方や考え方が進化しております。

ご存じのとおりSDGsは持続可能な開発目標ですが、一人一人の個人がどのように向き合っていくのかという事については決して難しいことをするわけではありません。本日はその実践例をご紹介いただくとともに身近で手軽にできるSDGsを広めていけたらと思っております。

結びに本日の交流集会が皆様の活動の一助となれることを祈念して簡単ですがご挨拶とさせていただきます。

来賓祝辞

埼玉県環境部資源循環推進課 副課長 安藤貴徳様

皆様こんにちは。ただいま御紹介いただきました、埼玉県資源循環推進課 副課長の安藤と申します。どうぞよろしく申し上げます。

「エコ・リサイクル交流集会 2025 SDGs の実践」開催に際し、一言御挨拶を申し上げます。

石川恵輪(いしかわ よしもと)会長をはじめ、NPO 法人埼玉エコ・リサイクル連絡会の皆様におかれましては、日ごろから本県の環境行政の推進に格別の御協力、御支援を賜りまして、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また、リサイクルの推進やごみの減量化に、日頃から取り組んでいただいている皆様に、この場をお借りして重ねて御礼申し上げます。

さて、今年度の交流集会は、「SDGs の実践」をテーマに、雑紙の資源化やオーガニック給食、着物のリメイクについてそれぞれ御報告があると伺っております。埼玉県も「5か年計画」において、「あらゆる人に居場所があり、活躍でき、安心して暮らせる社会」を目指し、「埼玉版 SDGs の推進」に取り組むことを掲げています。

埼玉版 SDGs としての取組は多岐にわたりますが、その中でも、商品やサービスの生産、利用、廃棄などあらゆる段階で資源の効率的・循環的な利用を行い、廃棄物の削減や環境負荷の低減を図るとともに経済成長を実現する、サーキュラーエコノミー（循環経済）を強く推進しています。

しかし、現状では、サーキュラーエコノミーへの意識や取組は、まだ十分に広がっていないのが実情です。事業者だけでなく、消費者である県民一人ひとりが、SDGs 達成に向けて積極的に行動していく必要があります。埼玉県だけではなく、埼玉エコ・リサイクル連絡会様のように、環境のことを考え活動されている皆様の御協力が不可欠です。今後とも皆様の活動を継続していただき、より多くの方々と連携しながら、平和に暮らせる環境を目指し、活動していただきたいと思っております。

最後に、皆様方の御健勝と貴団体のますますの御発展を祈念いたしまして、簡単ではございますが、御挨拶とさせていただきます。

「雑がみポン」活動報告

NPO 法人さやま環境市民ネットワーク

大貫裕子様・安藤倫子様・長谷川秀夫様・吉岡勇三様

代表理事の吉岡様より NPO 法人さやま環境ネットワークのご紹介をいただきました。

2003 年 任意団体さやま環境市民ネットワーク設立

2007 年 NPO 法人さやま環境市民ネットワーク設立

急激な都市化が進んだ 20 世紀後半行政と市民が狭山市の緑や川の環境を守ろうと立ち上がり、2009 年彩の国埼玉環境大賞受賞、2021 年脱炭素チャレンジカップ環境大臣金賞受賞、会員数約 180 名(個人、団体、企業)。

緑、川、ごみ減量、温暖化対策の4つの分科会で構成され各分科会が公民館や学校向けに普及・啓発活動をしています。

「雑がみぽん」の活動

狭山市のゴミの状況ですが家庭ごみの73%がもやすごみで、もやすごみの半分が紙・布類であり、資源ごみとなる「雑がみ」を活かすことができればごみの減量につながる事に着目しました。

「雑がみ」を生かせば資源、燃やせば CO₂を合言葉として「雑がみポン」と名付け幼児向けに活動をしています。

大人が子供に躰けるより、幼児から大人に向けた伝え方が有効と考え、雑がみ袋を作り家庭に持ち帰らせました。

この後実際に幼稚園などで「雑がみポン」活動を行っているビデオをご紹介いただきました。ゴーマー博士の大貫さん・安藤さんが環境の好きな「環ちゃん」を抱いて腹話術で園児に優しく説明しているのが印象的でした。

会場でも参加者が実際に雑がみ袋作りを体験しました。普段の活動同様にご説明いただきました。狭山市では雑がみ袋に雑がみを入れてそのまま回収しているそうです。

また、袋を連結させてハガキなどの個人情報がかかれていたものは破いて左右の袋に交互に入れる事により守られるとの事です。

最後に「ざつがみポンのうた」をご披露いただきました。

(報告者 石川)

参照 NPO 法人さやま環境市民ネットワーク HP

<https://blog.sayama-kankyo.org/2025/02/20250220.html>



「オーガニック給食とSDGs」

NPO法人生活工房つばさ・游 高橋優子様

1971年 残留農薬に問題意識を持った志ある農家さんたちにより「日本有機農業研究所」が結成され「有機農業」という言葉が誕生しました。

農薬は「薬」と記すがその実は「毒」である

近年私たちの身の回りでも、スズメやツバメが減少しており、これらは残留農薬の影響によるものと考えられます。



有機農業には「食の安全」以外にも多面的な機能がある

「土壌の健康維持」

「水質保全」

「生物多様性の保護」

「温室効果ガスの削減」

更に、田んぼは、「水害に備える防災の役

目も果たしてくれる」

有機農業を広げていく上で、生産はもとより販路も大事。

出典：食品と暮らしの安全 2020..11 NO.379

発達障害児の推移

(小・中学校で通級による指導を受けている生徒数)



安全な食べ物をまず子供達に食べさせたい、という思いから、その販路として学校給食に注目。講師がここで示したデータは、発達障害児の数と農薬使用量の推移が同調していることを表しており、その因果関係を示す明確なエビデンスは無いとはいえ、予防原則「疑わしきは用いず」が良いのではないかと、とのこと。

オーガニック給食の事例として4例を紹介

- ①長崎のマミー保育園ではオーガニック和食(ご飯と具たくさんみそ汁)にすることで病欠が減り、体温が上昇した。(SDG2)
- ②静岡県袋井市では教育委員会美味しい給食課が積極的に関わる事で地産地消率が急激に上がり、適切な温度管理によって生食で提供できる。(SDG3)
- ③40年前からオーガニック給食に取り組む東京都武蔵野市は、調味料やサラダ油にまでこだわっている。(SDG12)
- ④千葉県いすみ市ではコウノトリが舞う環境に優しい地域づくりの観点から、餌のために無農薬の田んぼを増やし、コウノトリが帰ってきた。(SDG13)

海外の事例として韓国の無償オーガニック学校給食の様子(契約計画生産で親環境無償給食を実施)もレポートいただきました。韓国では有機農家への支援も手厚い、とのことでした。

オーガニック給食を始める為には、安的供給、予算、現場での対応など課題はありますが、それぞれの課題に対する解決案もお示しくさせていただきました。

これからは「自産自消」の時代

小利大安の下里モデル、地域から得られる利益はみんなで分かち合い、利益は少ないけど大きな安らぎを得て生きていこう。

物を買うときは、裏側を見て、オーガニックを選びましょう。

できれば地元の農産物を選びましょう。と締めくくられました。

(報告者 佐藤正和)

楽しくごみを減らそう 着物リメイクに挑戦 グリーンコンシューマー委員会

大前 万寿美

着物が捨てられている

実家じまいの際に、母、祖母の着物の始末に困り、燃やすごみに出されている現状があります。日本の文化は大切にしたいけれど、現代生活の中で、たもとが邪魔で着物を着て過ごすことはなかなか困難です。我が家でも、私が死ねば、着物の価値がわからず、息子たち家族に廃棄されてしまうのでは?と心配です。そこで、着物のリメイクに挑戦してみました。

天然繊維は、マイクロプラスチック削減にもつながる

フリースなどの化学繊維衣料は、洗濯の際にマイクロプラスチックを排水と一緒に環境中に放出しています。水や生き物から摂取するだけでなく、呼吸によっても浮遊するマイクロプラスチックを体内に取り込んでいる問題が発生しています。

お蚕の繭からとれる天然繊維、絹の着物を日常の衣類に活用することで、環境と健康を守ることができます。

絹の特徴

・吸湿性、放湿性に優れている

- ・軽くて柔らかい
- ・紫外線を吸収する

主成分は18種類のアミノ酸で構成されている、お肌との親和性が高い「動物性タンパク質繊維」です。高級なシルク入り化粧品を使用しなくても、ストール、パジャマ、下着、布団カバーなどにリメイクすることで、快適な生活ができます。

まっすぐに縫うだけなので、お裁縫が苦手でも大丈夫

着物はほぼ直線のみで縫われています。ミシンで縫うと縫い目が裂けてしまうような織物もあります。手縫いで、ザクザク縫っても出来上がりに影響が少ないので安心して挑戦してみましょう。



参加者がモデルさんになり、着心地も体験！

初心者は羽織に挑戦

ハサミを入れるのに抵抗がある方は、袂の下部分を縫い縮め、ボタンととめ紐を取り付けるだけでジャケットとして着用可能です。糸を抜けば、元の羽織として使用可能です。

袂の下部分を、カットしてとじ付けると動きやすいジャケットになります。

絞りの特徴

軽くて暖かい。解くと伸び縮みします。襟の部分だけをほどいて、裏地に別布を足すと半コートやカーディガンの代わりに重宝します。

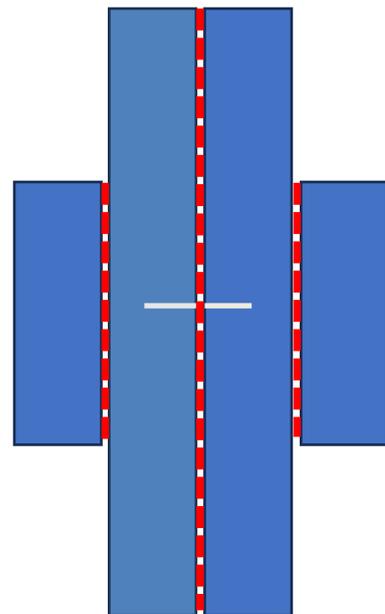
縮緬の特徴

丈夫で肌触りがとても良いので、着物としてきれなくなった色が派手な着物やシミがついてしまった着物は、パジャマにリメイクすると良いです。

大島紬の特徴

ミシンでのリメイク、洗濯が可能です。赤がたくさん入った派手な柄などで、首と袖口だけ残して直線縫いでできるポンチョなどから、始めてみましょう。

複雑なデザインのものにも適しているため、幅広いリメイクに適しており人気です。



赤線部分をつなぎ合わせ、首周りと裾の始末をすれば、ポンチョ完成。

シルクは夏でも冬でも着心地が良い

昔の人々は、冬になると秋に使用していた着物の中に綿を詰めて冬着として使用し、春になると綿を抜くという工夫をしていたそうです。これに倣って、私も袖なしの夏用のブラウスを、秋には長方形の共布を縫い付け長袖にして着ています。真夏になれば、糸1本をすっと抜けば、涼しく着ることができます。衣類のかさも増えず、断捨離を心掛けている方にピッタリです。

着物リメイク品を海外で生産、浅草で販売

一般廃棄物の中の資源ごみとして出されている古着の回収事業を行っています。エリアは、主に埼玉県内と西東京の古着を回収し、年間800tくらいの量を取り扱っています。

本日は着物のリメイク品をご紹介します。キムラセンイ(株)では、2001年からマレーシアのペナン州で選別や加工を行っています。本日紹介するために持ってきたリメイク品の特徴の一つは、海外の若者たちが作っているということ、そしてもう一つは、それを逆輸入して浅草の新仲見世の自社の店舗で販売しているということです。

キムラセンイ(株) 佐藤正和氏



バッグについては、少々外国人向けのデザインになっており、中はポケット付きで、キムラセンイ(株)のお店の「き」のロゴを付けてあります。よろしければお店をのぞいてみてください。浅草きらく屋です。クッション、和風のバレッタなどの髪飾りやボタンなどの小物も販売しております。どうぞよろしくお願いいたします。

ごみ減量のために

ごみを知ろう委員会 中澤啓子

本日展示しているスラッシュキルトは、子どもの浴衣をほどいたものやシーツなど10枚程度を重ねて縫い合わせたマットです。斜め直線でキルティング加工をしたのち、縫い目の線と線の間に入り込みを入れて作ります。タオル地で作ったマットに風合いは似ており、丈夫なので洗濯機でジャブジャブ洗え、10年程度使用に耐えます。

また、男物のTシャツと巻きスカートをつないでワンピースにしたり、冬物の子どものパジャマの袖に頭と前足部分の穴をあけてワンちゃんグッズに作り替えたりしています。

エコ・リサでは、ごみの組成に水分量に戻して推計値を算出

市町村でだされるごみのデータは、水分量を除いた乾燥した後のごみの組成分析です。エコ・リサごみを知ろう委員会では、水分を組成ごとに戻した現実に近いごみの量のデータを算出しています。結果として減ってきているのは、生ゴミです。総菜やカット野菜を購入する生活が影響していると考えられます。他のごみは増えており、特に増えているのはプラスチックごみです。

(報告者 大前万寿美)